



男女共同参画



harmony hiroba



ハ 一 七 二 一 広 場

男女共同参画社会を目指して

2013 Vol. 64

それぞれの男女共同参画 チャレンジストーリー

「チャレンジストーリー」では、個人・団体・事業所の皆さんのチャレンジをご紹介します。
起業、地域活動、働きやすい環境づくりなどさまざまな分野で広がる男女共同参画社会。
それぞれの活動を参考に、皆さんも新しいチャレンジを始めてみてください。

Let's Challenge!



Challenge! story 1
個人の取り組み紹介

茨城海保初の女性保安官



茨城海上保安部 地域防災対策官
かわはらやま 川原山 由香さん

川原山由香さんは、昨年10月に新たに設置された地域防災対策官として、ひたちなか市にある茨城海上保安部で活躍する女性保安官。同保安部で、女性保安官の配属は昭和23年の設立以来初めてです。地域防災対策官は、東日本大震災をふまえた災害対策強化のため、全国7保安部に設けられたポストで、自治体が策定する地域防災計画の実効性を高めるために、防災会議で提言や助言を行い、関係機関との連携強化を図る仕事をしています。

川原山さんは東京都出身で、平成4年に海上保安庁に入庁し、海上パトロールや密猟・密入国の取り締まりに当たって

2年半にわたり東京海上保安部の巡視艇「やまぶき」の船長でした。

職場は、女性は全体の約5%で、ほとんどが男性という環境です。「男女が同じように仕事ができる現場で働きたかったのが、男性が多くても抵抗はなかったです。同僚は特に私が女性だからとは見ていないので、同じように扱われています」と川原山さん。女性であることで困ったのは、「トイレのない小型船に乗船するとき、トイレに行けない密漁者の張り込みの時ぐらいい」と笑います。女性ならではの仕事としては、女性の密入国者が多かった時期に、数少ない女性保安官が集められ、

寝る間もなく身体検査をしたことがあるそうです。川原山さんにとってこの仕事のやりがいは、「海を通していろいろな人と知り合いになれるし、男女平等で仕事ができ、差がないのがいいですね。女性にもどんどん進出して欲しいです」と、海の似合う笑顔で話してくれました。

そんな川原山さんと海との関わりは子どもの頃、「父が船の無線の会社に勤務していたので、大型船を見学に行っていたりして憧れました。船や水泳も大好きで、海に関わる仕事がしたいと思い、たどり着いたのが海上保安官でした」と言います。これが



▲海で働く女性を増やしたいという想いから書籍執筆に参加



▲海を守る茨城海上保安部



▲津波の恐ろしさを伝える玄関のガラス

らも海とずっと関わっていたという川原山さんは、現在はデスクワークが中心ですが、海水浴場で一般の方に海の素晴らしさを伝え、安全を守りたいと、ライフセーバーの資格を今年取得しました。また、平成19年には女性6人でドーバー海峡を泳いで往復したり、トライアスロンや勝田マラソンにもチャレンジしているスポーツウーマンでもあります。

県北で人や地域・文化をつなぐ



地域おこし協力隊「Relier(ルリエ)」の皆さん

▲左から 笹川貴吏子さん 石川明紗さん 長島由佳さん 野崎真衣さん 白石百合乃さん

ルリエは、常陸太田市の里美地区と金砂郷地区で活動する地域おこし協力隊。地域おこし協力隊とは、都市住民など地域以外の人材を地域社会の新たな担い手として受け入れ、地域力の維持・強化を図る総務省の事業です。平成23年4月から里美地区で3名、平成24年4月から金砂郷地区で2名が活動しています。この5名の皆さんは、全員が東京の清泉女子大学の卒業生です。着任後に決めたチーム名は「ルリエ」、フランス語で「つなぐ・結ぶ」という意味があります。

それぞれの応募の動機は、里美支部の長島由佳さんは「国際関係の仕事がしたくて旅行会社に勤務しましたが、入社から3年経って国内に

目を向けようと思った時に協力隊の話がありました」とのこと。同じく里美支部の笹川貴吏子さんは「国際関係の仕事がしたくて大学院進学を考えていましたが、現場の経験を積むためにまずは国内で活動しようと思いました」、石川明紗さんは「つくば市出身なので県内で就職をと思い、協力隊も選

択肢の一つでした」と話します。金砂郷支部の白石百合乃さんは「大学4年の時に愛知県豊根村にフィールドワークで行ったときに、地方の豊かさや温かさを知り、そういう体験をもっとしたい」と思いました。野崎真衣さんは「学生時代に里美地区にフィールドワークで来て好きになり、この制度を先にすすめられて応募しました」と

いっことです。ルリエの活動の内容は、「地域資源の発掘、情報発信、交流人口の拡大、地域コミュニティの強化の4本柱です。里美支部では若者のネットワークづくりを力を入れていきます。20代から40代くらいの人たちが地域の中で出会う機会が少なく、地域のために何かをしたいという気持ちがあっても仲間づくりがしにくくなっているの、人と人をつなぐ活動をしています。その一環として、里美の水でつくった珈琲を販売してその収益で森林や水源の保全活動をする里美の水プロジェクトに参加し、活動を通して人材の交流を図っています。地域の旬の食材をクローズアップしたツアーや、レシピも制作しています」と長島さん。

金砂郷支部では、「やはり若手のコミュニティづくりをしています。ふるさと体験交流施設かなさ笑楽校が昨年9月にオープンし、現在は市が運営していますが、ゆくゆくは地元にもバトンタッチしたいという意向なのでそのお手伝いもしています。金砂郷は、常陸秋そばの発祥の地なので、そこのPRイベントの協力も行っていきます」と野崎さん。

活動を通じて感じることは、「地域のために何かをしたい」という仲間が増えてきたことがうれしいです」と笹川さん。自分たちの活動は、住民自らが地域のために動きだすきっかけづくりだと話す5人です。今後は、任期を終えても仕事として活動を継続したいという人、大学院に進み夢を叶えたいという人、定住を目指して活動していくという人など様々ですが、ルリエとしての経験を糧にキャリアアップを描いています。

「協力隊と言っても、地域の人に私たちが協力してもらっています」と笑顔で話す5人のメンバーは、人と人、人と地域をつなぎ、里美地区と金砂郷地区に元気と活気をもたらす原動力となっています。



いっぱい穫れたよ〜!



そば打ちにもチャレンジ!!

活動を通して感じることは、「地域のために何かをし



千葉テレビ出演!



▲つげけんちんそばを紹介した本を作成



スタッフ全員が女性のセレモニーホール

スタッフが5名全員が女性ということが、かすみがうら市の葬儀社(株)ともえの最大の特徴です。男性は、代表取締役の小林弘幸さんのみ。会社設立当初の25年前は男性社員もいたのですが、10年ほど前からスタッフは女性のみになりました。仕事の内容は、「お葬式が発生し、連絡をいただくと、ご自宅に打ち合わせにうかがい、日程やご住職の都合などを聞いて段取りをします。この地域は近所の組合の方がお手伝いに入るので、その方たちと打ち合わせをしてスムーズに進行できるように調整もしています。お葬式のディレクターのような役割です」と、在職18年のベテラン主任 齋藤幸江さんは話します。



△トモエホール



株式会社ともえ
主任 齋藤 幸江さん



▲ホール内のキッズコーナー

スタッフが女性のみの強みは「当家との打ち合わせをするときに、女性だからこそ安心して話してもらえることがあります。言いやすいし、質問しやすいと奥様方はおっしゃいます」とのこと。また大変さについては、「小さい子どもがいるスタッフは、お通夜とか、遅い時間の打ち合わせが大変なのではないかと思えます」と齋藤さん。それでも出産を契機に退職した女

性はおらず、産休・育休後に復帰しています。産休・育休が出た場合、その期間は残りのスタッフでカバーします。「大変なときはお互い様だから」と、思いやる気持ちとチームワークで乗り切ります。復帰については、それぞれが十分に経験を積んだスタッフなので、スムーズに現場に戻れるということです。



▶ホー化設置されたコールドリボンの自販機。売上の一部が小児がん患者の支援に充てられます。

働く女性を支援する制度や体制は産休・育休以外にも整っており、出勤時間はフレックスタイム制を導入、前日や当日の都合で出勤時間を調整できます。さらに土日祝日は子連れ出勤を奨励し、スタッフが働きやすい環境づくりを推進しています。スタッフの柴沼理恵さんは、「保育所は土日は子どもを預けられないので、子どもを連れて出勤できるのとても助かっています」と話していました。お母さんと一緒に出勤し



▲事務所の壁には子ども達が描いた絵が飾られています

ませんが、子育て卒業世代は有休と合わせて長期の休暇が取れます」ということでした。

社長の小林さんが大の子ども好きということもあり、子育て中の女性と子どもたちを様々な制度や、温かい環境をつくってサポートしています。茨城県では、出産や子育てのしやすい環境づくりを進めるため、県内の企業や事業所を対象に、従業員の仕事と子育ての両立支援や、地域住民の子育てを応援するための取組みを行う企業を、「子育て応援宣言企業」として登録しています。「ともえ」も、茨城県子育て応援宣言企業に登録されています。

